アンデス文明形成期における セトルメント・パターンの変化

－ラクダ科動物の分布拡大を手掛りとして－

大　谷　博　則

本稿では、海岸地帯におけるラクダ科動物の飼育化の導入がみられる社会の分類を行なっている。分類を行なうために、海岸地帯と山岳地帯の間の社会関係を海岸部のセトルメント・パターンの変化を見ることで検証している。本稿では、海岸部でのラクダ科動物の利用目的を食肉用としてみている。そのため海岸部での動物遺存体の比率や生業に関してのデータと比較することで、海岸社会でのラクダ科動物への依存度の推移をおっている。

海岸でのエル・ニーニョ現象による漁獲量の変化やラクダ科動物の環境適応能力を明らかにすることで、本稿の分類を補完する役割を果たすものと思われる。

カスマ谷、ラ・レチェ谷、スペーニャ谷の3点で特徴的なデータが取られている。

カスマ谷では、海岸地帯でのタンパク質源としての海産資源の欠如を補う目的で、山岳部から導入されたようである。

ラ・レチェ谷では、海岸線からの距離が他の遺跡と比較して離れているために、海産資源と農産物との交換だけでは不足するようになり、山岳地帯からラクダ科動物の干し肉である、チャルキの獲得から、しだいにラクダ科動物自体を海岸部で飼育、繁殖するようになっていった。

ネペーニャ谷では、草創期にカスマ谷に労働力が提供されていたため、ネ

ペーニャ谷はほとんど使用されていなかった。前期ホライズンに入り山岳部集団の移住とともに、海岸部にラクダ科動物を引き連れてきたと、考えられる。